

一遍教學における時間について

河野 憲 善

一遍が弘安九年大和當麻寺で書いた誓願偈文に「命斷須臾、聖衆來迎、乘佛本願、往生極樂」とあり、語録に「淨土門は身心を放下して三界六道の中に希望する所ひとつもなくして、往生を願するなり。此界の中に一物も要事あるべからず。此身をこゝに置きながら生死をはなるゝ事にはあらず」という。三界六道に此土入聖を斷念した淨土門の正系としてのあり方であり、臨終命斷のきざみ西方蓮臺に化生することが唯一の解脱の道である。現實は水の泡の如く亦單に一形造惡の世である。穢土と淨土は絶対に斷絶し、現實を永遠の相の下に見ることは許されない。乘佛本願、死の彼方に救濟を願う他力易行の基本形態に立つている。

然し、更にこの淨土教本來の立場を契機として、願生心を肯定し同時に否定する高次の次元を展開する。「願往生のこゝろは名號に歸するまでのこゝろなり。我が心は六識分別の妄心なる故に彼土の修因にあらず。名號の位即ち往生なり。故に他力往生といふ」と。別願超世の名號は、その功德は六識分別を超えるものであり、名號に歸する迄の十念肯定の段階は、別願和讃に「始めの一念よりほかに最後の十念なけれども、念をかさねて始めとし、念のつくるを終りとす」という念の頭数を否定する當體の念佛に止揚される。捨此往彼の教義門はそのままに實義門に綜合され、絶対に否定された

現實は念佛の眞實において肯定される。淨穢が斷絶するのは輪廻生死の凡夫の立場であり、永遠の今が肯定されるのは機法一體の蒙光攝においてである。機法一體は手段でも方便でもなくて念佛即往生となる。自なるもの、はからいにおいてそうあるのではない。既に法然に「一念に一度の往生をあておき給へる願なれば、念ごとに往生の業となるなり」とある。

證空の他筆鈔下に「南無者十方衆生阿彌陀者法也佛者能覺之人。六字暫開機法覺三終三重成一體也。然則名號之外無能歸衆生無所歸之法無能覺之人也。是則絕自力他力絕機法處曰南無阿彌陀佛也。名號六字名外無體體外無名是云三名體不二法門一口決祕事也」とあり、これが和文となつて一遍の語録に見られる。「聖道淨土の二門を能く分別すべきものなり」と教えつゝ「機法をたてゝ迷悟をおかば病藥對治の法にして、眞實至極の法體にあらず。迷悟機法を絶し自力他力のうせたるを不可思議の名號ともいふなり」という。自力他力のうせたる至極の法は證空に源する。自力他力を判釋するのが教義門、實義門においては自力他力は初門のこととなり、自他を絶する處に絶対の他力がある。往生は命斷須臾にあるのではなく名號即往生となる。これは證空一遍ともに力説するところである。淨穢隔塵と生佛不二との交渉は十一不二頌に示される基本綱領である。亦「名號酬固の功德に約する時は十界の差別なく、娑婆の衆生までも極樂の正報につらなるなり。妄心に約する時は淨穢も各別なり、生佛も差別するなり」とある。十界依正一遍體ともいう。善惡の境界皆淨土であり、法藏固位の願行は眞如の起動に外ならなく、名號の智火によつて一生造惡の根機は自己本源の姿に歸る。

一遍は「往生は初めの一念なり。初めの一念といふもなほ機に付きていふなり。南無阿彌陀佛はもとより往生なり」亦「然れば一念に往生せずば無量の念にも往生すべからず」という。蓋し當體一念のことであり絶對の而今をいう。機法一體が絶對現在に位しているのであり、永遠の今が脚下に迫つてゐる。臨平一等にして只今の外に念佛は實存しない。論註に依據して平生時一念歸命を無後心無聞心としてゐるのであり、聲々の名號は當體一念にきわまるのである。觀想の對象でもなければ概念でも倫理でもない、一瞬一瞬絶對者と對決してゐるのである。直下承當の只今、現實に見失われた永遠は名號の當體に奪取される。「大經には住空無相無願三昧と説けり。此即ち名號なり。我等は無相離念の觀法もならず自性無念のさとりもならず、底下愚縛の凡夫なれども身心を放下して唯本願をたのみて一向に稱名すれば是即ち自性無念の觀法なり、無相離念の悟りなり」とある。唯佛與佛、佛々相念の境地であり、法事讚下より引いて「一塵無移亦不動」ともいう。六識凡情をもて思量すべからざる法、不可思議不可得の法と斷つてゐる。

語録に引用されてゐる經疏に餘乘の典籍は極めて少く、禪學の文獻は固よりない。然し時間論において道元の思想に親近性をもつことを看過することは出来ない。亦念佛即往生が修即證であることもおおうべくもない。正法眼藏の時間論に比すれば一遍の語は餘りにも簡結であるが、それが何を意味しているかは明瞭であらう。蓋し時間に實體を認めず自性 *svabhava* を認めないのが佛教の傳統である。一遍における機法一體は時間を切斷する一刹那にあり、三世截斷の只今にある。大悲に働かれて、永遠は死後に邂逅されるのではなく當體の念佛として實存する。當體の念佛とは名號「一遍であ

り、回心念々の稱名であり、端的に一聲であつて不連續の連續として相續する。主體的體験としての行程である。一遍によつて把握せられた全佛教は當體一念の宗教體験の外にはなく、三世は水平化にあるのではなく、即處現成の只今が優越する。機法一體とはかかる直接的具體な體験を指してゐるのであつて、決して考えられてゐるもの眺められてゐるものではない。

觀照と論議を超えた當體の一念は一遍教學の課題であり、時間論が道元のそれを彷彿せしめることを認める前に、既に西山義が何程か道元の禪に接近してゐることを認めなければならぬ。證空が「今念佛即往生とは一念も機の功を待たざる位に決定往生する體、これを他力不思議の願體と云ふなり」と。修即證の念佛である。亦「相續不斷の謂れも自ら一つの名號に具足するなり」とも「夜もすがら念じ日ねもすに唱ふれども自力にはあらず、念々聲々に他力の功德が圓滿するなり」ともいう。時間を切斷する瞬間とその反覆としての一念一行は西山義にも見られるものであるが、一遍教學がこれと區別される點は當體一念において時間論が一層顯著であることと教義が簡素化されてゐることである。而して道元の禪もその究竟において何程か淨土教に近く、表面的には必ずしも厚意をもつていないに拘らず、道元と證空一遍の兩系列が相互に接近してゐるということができるのではあるまいか。通説の如く道元と證空が久我家の出であり、懷英が證空より道元へ、如一が道元より證空更に一遍の會下に移つた等の事情が、教學を側面から刺戟したのではあるまいか。